

かずさの博物誌

マヒワ(真鶉)

～群れをなす萌黄色の小鳥～

文・写真／成田篤彦

この三月に小櫃堰(おびつせき)公園に沿ったわき道を歩いていたら、すると葉を落としたイチヨウの木から数十羽の黄色の小鳥が一斉に飛び上がった。コンパクトな群れで、鳥たちの黄色と頭の黒のコントラストが際立っていた。

「見事な眺めだな」と一瞬見惚れてしまった。

数えてみると五十八羽であった。細かい声でピチピチ鳴きながら群れで波打って飛びまわった後に、そろって右手の草原に降りた。草原にはヒメオドリコソウやノボロギクやナズナが一面に花を咲かせていた。

「今の時期にカワラヒワの群れか? それにしては群れが大きいし、体が小さめだ。カワラヒワではない」と思った。彼らは盛んにノボロギクの種子を食んでいた。胸や腹は鮮やかな黄色で頭のてっぺんが黒く、背は

緑灰色で、翼に黒い帯があった。また、胸や腹が目立たない灰色のものもいた。「あ! マヒワ」。ここにもやって来たのかとびつくりした。

マヒワはコメ

ツガ、カラマツ、スギ、モミ、アカマツなどの針葉樹の種子やハンノキなどの落葉樹の種子を食べると聞いていたので、草の実も食べるとは思いもよらなかった。

近づいてシャッターを切っていると何がきっかけか分からないが一斉に飛び上がり、近くの木に止まった。しばらくするとまた、草原に降りてきて、草の種をついばんでいた。

また、時には、青々と茂ったアカマツの中で、ピチピチピチと絶えまなく細かい声で鳴き交わっていた。たまに、「ビューン、ビューン」と長く伸びるさえずりも聞かれた。この鳴き声は強く張った針金を弾いた時に出る音に似ていた。

この草原にはノボロギクが豊富に生えているから、当分ここでえさを採るに違いないと思った。思った通りで、彼らは三月の中頃から四月初めまで午前中にこの草原にやって来ていた。

さて、彼らはロシア、アムール川沿岸、サハリンなどの針葉樹林帯に生息する。日本では北海道の針葉樹林で少数繁殖するが、多くの地域では冬鳥である。上総にも冬に訪れる。常に群れで行動し、時には数十から数百の群れになるそうだ。

ところで、十数年前丘陵地で数十羽のマヒワの群れを見た時も新芽を出した木々をバツクに燃えるような黄色が美しかった。その時以来、上総でマヒワに出会う機会を待ち望んでいた。しかし、ここ数年、平地では彼らに出会えなかったが、今年は袖ヶ浦公園でも木更津市の郊外や千葉市でも彼らを見る事ができた。



▲ノボロギクの種子を食べるマヒワ
左:メス、中央と右:オス。体長約13cm。
体重9~17g=2011年3月16日 木更津市
=成田篤彦撮影



▲春にさえずるマヒワ
オスの色彩がより一層鮮やかになる。
2011年4月4日 袖ヶ浦公園=成田篤彦撮影

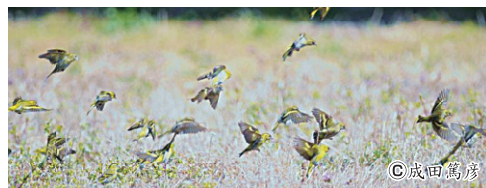


▲マヒワ スズメ目 アトリ科 冬鳥。
イチヨウの木で休む=2011年3月17日 木更津市=成田篤彦撮影

マヒワは枯れ草などで採食することもあるが、樹木の種子を食べるのに適応した鳥で、渡りの状況も樹木の種子の豊富さに関係があるという。食物が不作の年には食物を求めてすべての群れが移動するそうだ。今年は今まで見られなかった平地でも観察できたので、樹木の種子が不作なのもかもしれない。

それにしてもマヒワは何か心を強く惹きつける。体が小さく、ほっそりして、可愛らしくて弱々しさを感ずるからか? それとも群れをなす雄たちの胸の緑がかかった鮮やかな黄色が、早春の山々に冴えわたるからか? ちなみに、鶉(ひわ)色とは雄の胸のあたりの黄色味の勝った萌葱(もえぎ)色のことだ(風信子著2008『俳句と詩歌であるく鳥の国』文一総合出版)。昔から、この色は人々に強烈な印象を与えていた色であった。

どちらにせよ、マヒワは、遠くは北方のロシアやサハリンなどの針葉樹林帯の繁殖地に戻っていかねばならない。彼らは栄養価の高い種子を腹いっぱい食べ、鳴き交わして、統制のとれた群れで移動するから、小さな体にもかかわらず、危険が避けられ、長旅に耐えられるのだと思う。



▲マヒワの群れ
2011年3月17日 木更津市=成田篤彦撮影

(参考文献)中村浩1997「マヒワ」日本動物大百科鳥類II平凡社